

試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2022 年度

北海道千歳リハビリテーション大学 一般選抜試験（A日程）

必修科目

国語総合

注 意 事 項

- 1 文字や記号は明確に判読できるよう丁寧に記入しなさい。
- 2 この問題冊子は、12 ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 問題用紙の余白等は適宜利用してかまいません。
- 4 問題冊子は最後に回収します。

第一問 次の文章について、あらすじとそれに続く文章を読み、後の問いに答えなさい。

◆ 今までのあらすじ

事情があり、母と離れて暮らしていた一人息子の稔は病弱な母といっしょに二人の故郷である沖永良部島に戻る。父が亡くなり、母も本家から離別されていたからである。二人は平穩に暮らしていた。ある日、母と海辺のサンゴ礁に小魚採りに出かける。やがて、帰ろうとするが、母は胸が苦しいと訴え、稔は母を介抱する。しかし、母はもう歩くこともできず、稔の助けを借り、岩場に身を寄せる。しかし、上げ潮が稔の膝まで満ち、二人に危険が迫っていた。

※ 上げ潮とは満ち潮のことで海面が上昇してくる現象のこと

母は、私に長く介抱させなかった。すぐにでも、どうかしなければならぬときだったからだ。私が、母の背中をさすったのは、極めてみじかい時間である。が、母はその間に何かを決心したのだ。何かを。

「もう、いいわ。ありがとう」

と、いつて、母は、ゆっくり私のほうへ向きを変えた。顔色がいくらか、落着いたようである。その青ざめた頬に、母は、光るようなA澳まじい微笑をうかべている。母のうしろには、青空がひろがり、肩のあたりに、雲が浮いていた。そのとき、私はどういうものか、母を非常に遠く感じた。母の顔が、雲の上にあつたせいかも知れない。母が、雲の上から私に呼びかけた。

「稔さん」

私はこのときいきがつまった。それは、聞いたこともないような声であつたからだ。非常に、やさしかった。私はそれまで、こんなにもやさしい母の声を聞いたことがなかった。気味が悪いほどそれはやさしかった。

私は、しばらく、何もいえなかった。その私の顔を見おろしながら、母は、おさえつけた声で、話しかける。

「お母さんはね、稔さんに、おねがいがあります。お母さんのいうことなら、稔さんは、どんなことでも聞いてくれますねえ。聞いてくださるでしょう。お返事してください」

私は、ひとつ、こっくりをした。母の胸は、せわしくあえいでいる。しかし、言葉は、まだしっかりしていた。

「お母さんは、なんだか、胸がくるしくなりました。それから、手足がしびれて、動けなくなりました。たいしたことはないように思うんですけど、歩けません。それで、稔さんにおねがいというのは、ホレ、うしろを見てください。B崖に、裂け目がありますね。あそこが、のぼり口になっていると思います。稔さんは、あそこへ、いっしょうけんめい、いそいでほしいの。そして、誰か、呼んで来てください」
母を、ここに、ひとり残して、早く帰れということである。私は、ぼんやり、母を見上げて、

「お母さんは、どうするの」

「お母さんは、ここで、この岩の上で、待っています」

「波が来たら、どうするの」

「この岩は、乾いています。波をかぶりません。お母さんは、稔さんが助けに戻ってくださるまで、この岩の上で、かならず、待っています。稔さんは、きつと、お母さんを、助けに来てくれますね」

母は、やはり、**イ光るような凄まじい微笑**をうかべている。その顔は、私に、ますます、こわく見えた。私は、こんなに、私を圧迫する母にはじめて相對した。母の態度には、どうしても、私を、自分の思う通りにさせなければ気のすまないきびしいものが、みなぎっていた。私は、うなずいた。母は、また私に札をいった。

「ありがとう。さあ、それでは、すぐ、いってください」

私は、動かない。動けない。この岩に心の残るものがあって、この場をはなれられない。母は、**a** **か**んでふくめるように、いい聞かせる。「稔さん。ホレ、崖の上が、赤く光っているでしょう。もうじき日が暮れます。**ウ** **い** **ま**の**う** **ち** **なら**、**ま** **だ** **間**に**合**います。稔さん。早くいきなさい」

その言葉が私に決心させた。間に合うとはなんのことを指したのか、深く考えてみる**b** **ヨ** **ユ** **ウ**はなかった。ただ、日が暮れるといったことが、私をいつそうろうばいさせた。母は、誰かといったが、私の頭には医者のことしかなかった。暗くなる前に、医者連れて来なければいけない、と思った。

「ぼく、早くいって、お医者さん連れて来る」

「そうしてください」

私は、**c**かけて行くとした。すると、母は、私を呼びとめた。

「稔さん」

とゆっくり手まねきして、

「これを持ってらっしゃい」

と私にビクをさし出す。

「おばあちゃんに、煮ていただいて、食べなさい」

「はい」

私は、いわれた通りにしなければいけないような気がして、ビクに両手をかけた。すると、母は、私の両手をしっかりおさえた。痛いぐらいに強くおさえた。みるみる母の表情が**C**崩れた。**エこれ以上作り笑いをうかべていられない、といった顔だった。**母は、思い切ったように叫んだ。

「稔さん。お母さんって、呼んでください。さつきから、まだ、一度しかいつてくれないじゃないの!」

「お母さん!」

「稔さん、もう一度……」

「お母さん!」

海鳴りに消されることを恐れて、私は高い声で叫んだ。

「お母さん、いってきます」

「ありがとう。水の青いところへはいつてはいけません。黒い岩を踏んでいそぐんですよ。お母さんはね」といいながら、母は、両手を肩にかけて私の向きを変えさせた。肩を握りしめたままうしろから

「ここからこうして稔さんをずっと見ています。いそぐんですよ。いそがないと、間に合わなくなりますよ。それから、どんなことがあつ

ても、後ろを振向いてはいけません」

私は、胸がふるえて返事が出来なかった。その私に、母はむりに約束させた。

「向うへ行き着くまで、どんなことがあっても、うしろを見てはいけませんよ。約束してくれませぬ」

私は、うなずいた。母は、私の背中を押した。私は、母の岩をはなれた。

(途中省略)

波に、ゆりあげられるようにして、私は、岸に這い上った。気がつくくと、手に何も持っていない。目は、すぐ、沖を向いた。

岩は、あった。しかし、それは、一枚の板の厚みになっていた。

岩は、たしかに、あった。けれども、その上に、母の姿はなかった。私は、自分の後ろを見た。母は、私といっしょに上がって来た、と思つたからである。

岩の表面を、私は、もつとよく見定めたかった。全部白かった。岩は、まるで、自分から泡をふいているように、まわりは全部白かった。クリームのなかに、浮いているようであった。

沖から走って来た波は、岩に邪魔されると、おこつて、はねあがった。すると、岩の後ろに、一瞬、水しぶきの白い幕が出来た。その瞬間だけ、岩の表面が、鮮明に見えた。

母の、白い顔があった。走っている姿を考えていたが、母は、仰向けになり、手足をまっすぐ伸ばして、顔だけ、私を向いていた。が、私と、目が合うと、母は、上を向いてそれっきり、こちらをみなかった。

私が、母に気づいた瞬間、母が、何故目をそらせたか。この謎は、それから長い間私を（オ）理解できるまで、三十六年かかった。じつさいに、その場所に自分がもう一度立ってみるまでわからなかった。

(二色 次郎『青幻記』)

問一 AからCまでの傍線―の漢字の読み方をひらがなで記しなさい。

問二 aからcまでの傍線ーのカタカナを漢字に直しなさい。

問三 傍線ーアについて、何を決心したのかを二十五字以内で書きなさい。

問四 傍線ーイのような表現は通常用いないが、本文の内容をもとにこのように表現した理由を二十五字以内で書きなさい。

問五 傍線ーウのように言った本当の理由を、二十五字以内で書きなさい。

問六 傍線ーエのような顔に変わった理由について適切なものを次のAからDの中から選び、記号で答えなさい。

- A 気丈にふるまってはいたが、永遠の別れを意識し、我が子へのあふれる思いを抑えきれなくなったから
- B 気丈にふるまってはいたが、死を自覚し、我が子への別れの思いを真剣に伝えようとしたから
- C 一刻の余裕もないことから、早く行かせるために別れのやり取りを切り上げようとする強い意志から
- D 一刻の余裕もない中で、自分の我が子へのメッセージを真剣に伝えようとしたから

問七（オ）に入る語句を、次のAからDの中から選び、記号を書きなさい。

- A こまらせた。
- B くるしめた。
- C ろうばいさせた。
- D かなしませた。

問八 左の文章はこの作品『青幻記』の鑑賞についてA(先生)とB、C(生徒)の会話です。作品の内容や主題を踏まえ、(1)から(5)に入る漢字の熟語を書きなさい。なお、()には会話の中の漢字の熟語は使われません。

A(先生) この小説は、作者の幼少期を回想した(1)的てきな小説で、母に対する(2)の思いが込められていますが、二人の感想はどうですか。

B(生徒) 私は、お母さんがとても(3)な言葉遣いで毅然として接する姿にひとりの人間として我が子に向き合う愛を感じました。また、そんな母が稔に「お母さん」と二度も呼ばせた場面は、強く印象に残りました。

C(生徒) 僕は、(4)を抑えた表現ながらも、母への深い思いは、母の行動や表情についての細やかな(5)に表れていると感じました。また簡潔で無駄がなく、たたみかけるような短文の流れは詩のようでした。

第二問 次の【本文A】、【本文B】と筆者の新聞への投稿文【本文C】を読み、後の問いに答えなさい。なお、本文冒頭は見出しです。

【本文A】個別性と（ア）の医学

リハビリ医療のひとつの特徴は、治療の対象となる障害、それを持つ患者の多様性、個別性が大きいことである。ある患者は、整形的処方が適当だし、別の患者では脳神経系の知識が必須である。症状の多くはその両方である。

個別性はほかにもある。患者にとつては、マニュアル通りに訓練すればよくなるものもいるが、多くの患者では、オーダーメイド的治療の処方が必要になる。訓練も一人ひとりの個別性を無視することはできない。

個別性とは、まず症状の多様性である。理学療法士は、基本的には医師の処方に従って訓練や指導を行うが、知らず知らずに患者の持つ個別の症状に合わせた訓練、いわばオーダーメイドの訓練にならざるを得ない。

さらに複雑にする要素は、末梢の障害の部位が異なるという個別性ばかりではなく、対応する中枢神経の支配の多様性によって、異なる対処が必要になることである。脳神経の損傷による障害では、病変が起こった脳の部位によって、当然末梢の障害の部位、程度、性質が異なる。身体の障害部位の多様性を考えるほかに、支配している脳神経の障害の多様性を考えなければならない。病態や治療を決定する二重の個別性である。たとえ同じ右麻痺と診断されても、脳の病変部位や広がりのちよつとした違いによって、失語症や失認症を伴うものと、そうでないものがあり、当然、大きく対応は異なるはずだ。

同じように見える麻痺でも、患者によって筋緊張の高いのも低いのもある。患者は性質の異なった苦しみを持つ。誰ひとりとして、同じ症状の患者はいない。対応は一人ひとり異なる。

脊髄損傷で、損傷の部位によって障害が異なるのは当然のことだが、加えて、性別、年齢、生活環境その他、外的、内的要因で対応を変えねばならない。さらに精神的、心理的な面の違いによって、異なったケアもしなければならぬ。一人ひとりがこのように違う病態とイ愁訴に対して、異なったりハビリ処方が要請されるのである。（後略）

【本文B】 医師と療法士

こうした患者の多様な病態に関する知識は、医師はもとより、直接に患者を指導する理学療法士など、パラメディカルの人たちの体に、経験を通じて**ウ脈々と**受け継がれている。これは彼らが、経験的に一人ひとりの患者を先生として発見した知識の集積なのである。

麻痺の苦しみは、なつたものでないとわからない。どこがどう苦しいのか、どうしてももらいたいか、文献を読んでもある程度しか分からないのだ。医師や療法士が知識として知っているのは、リハビリ医学の教科書に書いてあることと、経験から自ら学んだことである。教科書の記載は、複雑な個々の病態には、あまり役に立たない。経験に学ぶことが、リハビリ科の療法士には特に求められている。

その**a** **シヨウコ**に、私は何人かの言語聴覚士の指導を受けたが、一人ひとり指導の仕方が全く異なっていた。教科書の知識の上に、患者から学んだ個々の経験の積み重ねがあったのだ。

それは医師にもいえる。リハビリ医療には、科学的に進歩しているとはいえない領域もある。嚙下のリハビリなど、何ひとつとして近代科学的に應用できるテクノロジーはない。私はリハビリ医学学会の特別発言を求められたとき、「**A** **嚙下**リハビリは石器時代です」と言った。言語リハビリに使う、リフトという、**B** **軟口蓋**を押し上げる装置があるが、中世の拷問器具に異ならない。まだまだ一人ひとりの患者の病態に学びながら、研究改善しなければならないことが多いのだ。医師もそれを認識して、謙虚にならなければならない。訓練室で、患者の訓練の様子を見ていない医師は、ほぼ信賴するに足りない。

一方、経験ある理学療法士には、実に優れた洞察能力が備わり、患者の苦しみを軽減する方法を探してくれる。マニュアルどおりのことではすまない場面に毎日当面しているから、そんな洞察力がつくのだ。個人のレベルの違いは、こうして生まれる。

ところが、**エ** **そんな能力**を持つ医師の方が少ない。知識だけでは分からないことに対処するのだ。医師は、実際の患者の訓練をもっと見守る必要がある。よく観察すれば、独創的なアイデアが生まれるはずである。

患者がある症状を呈するとき、どの筋肉を強化するべきか、どうすれば苦痛を軽減して、力を入れることが出来るようになるか、どんなストレッチをすれば苦痛が**b** **ヤワ**らぐのか。総論的知識は必要だが、理学療法士は患者から学んだ知識で行う。

私の場合には重度の右麻痺で、大腿四頭筋などは、まったく自発的には動かないが、大腰筋と腸腰筋は少しだけだが動く。これを強化して歩く訓練をしてきているらしい。私は幸運にも、そういう能力を身につけた理学療法士に出会い、心から尊敬するようになった。それが実力の違いになる。

こういうことは数値では表せないし、計測の方法もない。残存筋予備能力（フィジカル・アベイリビリティ）を計測し、応用する研究も必要だ。

日常生活も、作業療法士抜きには回復し得ない。言語療法士は、構音の複雑な生理学を理解し、口のきけない人や失語症の患者をしやべれるようにする。言葉の意味が分からない失語症患者には、絵画や習字を習わせながら、人間復帰させる。単調な訓練をいやな顔一つせず、長期にわたって献身的に続けてくれるおかげである。それも、一人ひとり原因も症状も違った患者に対応して、療法士が自ら発見したやり方を持っているからできるのである。尊敬のほかはない。（後略）

（多田 富雄『私のリハビリ闘争』）

【本文C】私の視点く診療報酬改定 リハビリ中止は（オ）の宣告（朝日新聞「私の視点」二〇〇六年四月六日）

私は脳梗塞の後遺症で、重度の右半身まひに言語障害、嚥下障害などで物も満足には食べられない。もう四年になるが、リハビリを続けたお陰で、何とか左手だけでパソコンを打ち、人間らしい文筆生活を送っている。

ところがこの三月末、突然医師から今回の診療報酬改定で、医療保険の対象としては一部の疾患を除いて発症後一八〇日を上限として、実施できなくなると宣告された。私は当然リハビリを受けることができないことになる。

私の場合、もう急性期のように目立った回復は望めないが、それ以上機能低下を起せば、動けなくなってしまう。昨年、別な病気で三週間ほどリハビリを休んだら、以前は五〇歩は歩けたのに、立ち上がることすら難しくなった。身体機能はリハビリをちよっとC怠ると

瞬間に低下することを思い知らされた。これ以上低下すれば、寝たきりの老人になるほかはない。その先はお定まりの、衰弱死だ。私はリハビリを早期に再開したので、今も少しづつ運動機能は回復している。

ところが、今回の改定である。私と同様に一八〇日を過ぎた慢性期、維持期の患者でもリハビリに精を出している患者は少なくない。それ以上機能が低下しないよう、不自由な体に鞭打って苦しい訓練に汗を流しているのだ。

そういう人がリハビリを拒否されたら、すぐに廃人になることは、火を見るより明らかである。今回の改定は、「障害が一八〇日で回復しなかつたら死ね」というのも同じことである。実際の現場で、障害者の訓練をしている理学療法士の細井匠さんも「何人が命を落とすのか」と三月二五日の本紙・声欄（東京本社版）に書いている。ある都立病院では、約八割の患者がリハビリを受けられなくなるという。リハビリ外来が崩壊する危機があるのだ。

私はその病院で言語療法を受けている。こちらはもつと深刻だ。構音障害が運動まひより回復が遅いことは医師なら誰でも知っている。一年たつてやっと少し声が出せるようになる。もし一八〇日で打ち切られれば一生話せなくなってしまう。口蓋裂の子供などにはもつと残酷である。この子らを半年で放り出すのは、一生しゃべるなというふうなものだ。言語障害者のグループ指導など、できなくなる。

身体機能の維持は、寝たきり老人を防ぎ、医療費を抑制する予防医学にもなっている。医療費の抑制を目的とするなら逆行した措置である。（途中省略）

何よりも、リハビリに対する考え方が間違っている。リハビリは単なる機能回復ではない。社会復帰を含めた、人間の尊厳の回復である。話すことも直立二足歩行も基本的人権に属する。それをcウu改定は、人間の尊厳を踏みこじることになる。そのことに気づいて欲しい。今回の改訂によって、何人の患者が社会から脱落し、尊厳を失い、命を落とすことになるか。そして一番弱い障害者に「死ね」と言わんばかりの制度をつくる国が、どうして「福祉国家」と言えるのであろうか。

本文の若干の表記補正あり。（多田 富雄 東京大学名誉教授 医学博士）

問一 AからCまでの傍線―の漢字の読み方をひらがなで記しなさい。

問二 aからcまでの傍線―のカタカナを漢字に直しなさい。

問三(ア)に入る言葉を書きなさい。

問四 傍線―イの言葉の意味について説明している左の語句の()に言葉を入れ、完成させなさい。

患者が訴える()のこと

問五 傍線―ウの言葉の意味について、AからDの中からふさわしいものを選び、記号を書きなさい。

A 皆に

B 永遠に

C 誰にでも

D 絶え間なく続いて

問六 傍線―エが現れている具体的な対応を書きなさい。

問七 本文Bの内容を次の文にまとめたが、(①) から (③) に入る言葉を書きなさい。

患者から学んだ (①) によって、よりよいリハビリの方法を探してくれる療法士の (②) 的姿勢に (③) している。

問八 本文Cの内容を踏まえ、(オ) に入る言葉を書きなさい。

問九 本文Cにおいて、筆者は、リハビリを本質的にどのようなものとしてとらえているのかを示している語句を本文から抜き出しなさい。

第二問

受験番号

問一

A
B
C

問二

a
b
c

問三

--

問四

--

問五

--

問六

--

問七

①
②
③

問八

--

問九

--

--

--

--